

「笹川杯作文コンクール 2013-感知日本-」

入賞作品集



2013年度テーマ：「中日の未来のために私たちができること」

目次

「笹川杯作文コンクール 2013」～日本語で応募～	2
(1) 優勝	
ハルピン工業大学 孫琳	2
佳禾外語培訓学校 李翌寧	3
(2) 二等賞	
上海海事大学 何軼倫	4
北京理工大学珠海学院 侯婉興	5
(3) 三等賞	
吉林化工学院 王婧瑶	6
北華大学 董欣欣	8
嘉興学院 蘆璐璐	9
五環国際労務合作公司 趙淑晶	10
(4) 優秀賞	
北京第二外国語大学 孫少凱	11
天津外国語大学 滕春萍	12
大連工業大学 楊晶晶	14
東北林業大学 周慧芸	14
華東師範大学 潘欣慧	16
吉林華橋外国語学院 解杰	17
四川外国語大学成都学院 黄嘉麟	18
福建師範大学 陳立穎	19
蘇州大学 徐郡	21
大連大学 杜洋々	22

「笹川杯作文コンクール 2013」～日本語で応募～ 入賞作品

※日本語の原文を尊重し、一切手を加えておりません。

(1) 優勝

中日の未来のために私たちが出来ること

ハルピン工業大学 孫琳



「真の国際社会では、皮膚の色、民族、言語などとは関係なく、皆平等に取り扱われることが求められ、山形の市民も、外国人を特別視するのではなく、平常心で接する時代が早く来るように心から願っている。」

これは、日本に留学している間、『山形紀行』という本から読んだ言葉である。

平和というのはいつまでも世界民衆が求める主題だと思う。だから、山形の市民だけでなく、全世界の人々も国際の限界を超えて、お互いに理解すべきだろう。中日は一衣帯水の隣国であり、昔から頻繁な交流が行われていた。今、釣魚島（尖閣諸島）の問題で、中日間の関係は一層深刻になってきたが、長い目で見たら、直ちにこういう状況を変えて、友好関係を結び続けることはとても大事だと思う。両国がお互いに現状をよく知った上、お互いの文化、習慣を理解し、尊重することはとても重要だと思う。

では、中日の未来のために私たちが何ができるだろう。

私は中学校から日本語を勉強してきて、日本語と、日本と、もう10年間以上関わってきた。日本にも2回行ったことがあって、自ら日本という国を感じ、日本人と接した。大学生の私は政治の問題に何もいえないのだが、日本人の中でとても親切で、中国人と友好関係を結びたい人はたくさん存在していると実感した。何を言っても、民衆には罪がない。だから、私たちから両国間の相互理解に力を入れるべきだ。

一：理性愛国

中国人の中には、反日感情を持っていて、侵略の痛みという『感情の記憶』は癒えない人もきっとまだ残っていることも事実だと思う。それに、最近釣魚島（尖閣諸島）の問題で、両国間の関係も一層深刻になってきた。中国でも、日本でも、いろんな矛盾で乱暴な振る舞いをした人がいた。確かに、それらの人は愛国の心を持っているが、扱う方法を間違えている。事実は事実である。誰でも以前の歴史を抹消することは出来ない。中国人の私にとっては、昔の残酷な現実を思えば、きっと心が痛くなるのだが、ずっと恨みを持って、両国間の発展や、平和に悪影響を与えることもよくないと思う。だから理性を持って、国を愛する必要があるのだ。中国に来ている日本人でも、中国で発展している日系企業でも、中国と友好関係を作るという理念を持っているだろう。だから、中国人は、もっとこういう人、こういう企業を歓迎すべきだ。逆にしても同じである。日本人も日本にいる中国人、日本マーケットを開拓しようとする企業を歓迎すべきではないのか。

二：誠実に伝える

人と人の間の付き合いで、最も重要なのは、誠実さと信実だと思う。国と国も人と同じだろう。留学しているうちに、日本人の多くはまだ中国の現状をよく知らないのだと気づいた。中国は近年目覚しく進歩してきているのに、ある焼き鳥屋さんに「中国って、今でもみんな自転車に乗っているの。」と聞かれたこともあった。

中国人としての私は、もっと日本人に中国の本当の姿を知ってほしい。政治の問題にもかかわらず、どの国でも、人々の幸せが一番だと思っている。やはり平和を願っていて、国と国が仲良くしてほしい人は多いだろう。だから、私はどうしても、自分の感じた日本人の優しさ、礼儀正しさ等を中国人に伝えたい。それに、中国人の正直さと熱情も日本人に示したい。中国の本当の姿を知ってほしいし、平和を願って、友好関係を作りたいという気持ちを伝えたいと思っている。

お互いに、誠実に接し、お互いによく理解し合うことこそ、友好関係を結ぶための第一ステージなのではないか。我々日本語学習者は留学、交流イベント、就職、旅行などの形でもっと真実な自分、真実な中国を日本の民衆に伝えよう。

三：交流を深め、相互理解

ちょうど今年の7月、私は日本科学協会に招待され、日本を一週間見学した。東京での二日間、多くの日本大学生はボランティアとして、私たちを連れてあちこちで遊んだし、討論会、料理大会、カラオケ大会などを行って一緒に楽しんだ。みんなの親切さと情熱に強く感動した。こういう中日関係が深刻な時期こそ、こういう民衆間の交流は極めて重要だと実感した。

今は、様々な交流や、観光旅行も盛んになってきた。日本の企業も中国で多く展開している。これらは全部交流の架け橋になると思う。どんな状況でも、こういう交流を絶えず、お互いに友好のために、手をつなぐことができれば、両者の関係はますます親しくなれるだろう。

私たち一人ひとりの力はわずかだが、みんなの力は大きい。自分から出発して、自分から平和の理念を伝えよう。

日本との出会い

佳禾外語培训学校 李翌寧



私は2010年に幸運的に日本の広島県にある大学に短期留学したことがある。短い留学生生活を過ごしていたが、たくさんの暖かい思い出があり、今でもその時のことが映画のように自分の頭の中で浮かんでいる。

初めて日本に着いた時、一人でとても寂しさを感じた。毎日一人で学校に通っていたが、周りの素晴らしい景色を觀賞するどころではなく、楽しさを感じる気持ちでもなかった。退屈だとしか思わなかった。一日中、たくさんの授業を受けないといけなかったし、生活費のためにアルバイトもしなければならなかった。毎日四時間のバイトを終え、寝る時間を削って夜中の2時まで勉強を続けていた。週末にも徹夜しながら勉強したが、日本語のレベルが思ったよりうまく向上させることができなかった。学校でクラスメートとコミュニケーションする機会を避けていた私は誰とも接触しなくて、一人で静かなところにいるのが当時の選択だった。そのまま留学の生活が過ぎ去っていた。

ある日、「もしよかったら、授業の後、一緒に食事でもしてくれませんか」と渡辺さんに話かけられ、「おや」と思っていた。渡辺さんと私は同じクラスである。彼女は私と友達になりたいといってくれた。日本語でうまく交流できない私を友達にしてくれるなんて、私はとても感動していた。

その後、渡辺さんは私を自分の家に招いてくれた。私の悩みを優しく耳を傾けてくれたり、いろいろな励ましい物語を話したりしてくれた。「もし李さんは日本でこまったことがあったらどうするの？」と私に問いかけたことがある。あまり考えずに「だったら、国に帰る。」と私は答えた。渡辺さんはしばらく考えた後、「中国に帰るというのも一つの選択肢だが、でも中国の留学生として誇りを持って日本で勉強してほしい。もちろん、困ったことがあったら、あきらめることは一番簡単であるが、一番難しいのはあきらめないでそれを乗り越えること、または前向きで挑み続けることである。進路が決まったものもそうでないものも関係なしに春は暦通りに来てくるんだから。」と言ってくれた。初めてこのようなことを言われた。外国人に心を開き、同じ社会の一員として受け入れてくれることがとても嬉しかった。

たしかに、私のように短期留学あるいは、長年間留学生生活を過ごしている留学生はたくさんあると思われる。そして、最初は私みたいに、日本人の学生と交流するのを避けている留学生もたくさんいるかもしれない。なぜならば、歴史などの問題ではなく、日本語が下手で、うまく自分が話たいことを相手に伝えることができなく、もし、話したことが文法と使った単語が間違ったら恥ずかしいと思うからである。でも、現実的に、留学生の言葉違いを見付けた時、あざ笑うの

かわりに、まじめに、熱心に、留学生の気持ちを考えながら、間違ったところを正しく直してくれる方がもっと多くいる。

今、日本と中国の関係は変わっていない。歴史は歴史として忘れることもないが、それは現在の中日友好を妨げにはならない。重要なのは現在と未来であると思う。もし、中国人と日本人がともに私のように、お互いに暖かさを感じることができたら、お互いに対する理解も深まっていくのではないかと思われる。

中日関係に欠けているのは、中日両国住民の暖かさではなくて、欠けているのは暖かさを感じる心だと思う。

(2) 二等賞

プチ薩長同盟

上海海事大学 何軼倫



爽やかな風に吹かれながら、外灘の遊歩道をぶらぶら歩いていた。真昼のごとく煌びやかな対岸や、川面に揺らめくネオン光が織りなす外灘の夜景は、絵の描いたようだといわれるが、上海生まれの私はとっくに見飽きていた。「つまらないなあ」とぼうっとしていると、突然、どこかから日本語が聞こえてきた。

少し探せば、すぐに見つかった。数人の若者がビール瓶を片手に興奮して大声でしゃべっている。日本語を一年半ほど勉強してきたが、実際に話す機会があまりなかったそのときの私の心の中に、「彼らに話しかけようか」という気持ちがわいてきた。

「すみませんが、日本の方ですか？」と、そのうちの一人に声をかけた。しかし、相手の反応は思いもよらないものだった。彼は身震いするほど怖がっているようだった。

その日から数日間、彼の青ざめた顔を脳裏から振り払えず、「どうしてあんな反応を見せたのだろう」としばしば思いふけた。その時は、やはり中国で嫌日の「憤青」などに会った日本人の体験談をたくさん聞いてきたからだろうかと思っていた。

そのうち、日本人と接したいという思いが芽生えてきた。その思いから、日本人向けの中国語教室の講師となった。

年上の人とちゃんと向かい合えるだろうかと思っていたが、年下の私に対しても思いのほかシャイに見える人が多かった。本などを読んで多少知っていたが、日本人はやっぱりこんな性格の人が多いのだなと改めて実感した。

私は、普段中国語でしゃべる中国の友人がいるかどうか、いつも聞いている。答えは常に「いません」だ。職場で日本語だけを使い、職場外の中国人と知り合う機会もないという返事を聞くと、私も「そうですね。残念なことです」と言うしかない。

ある日、ある考えが突然ひらめいてきた。職場外の中国人と知り合う機会を作る方法だ。上海にある日本人の野球チームに上海人のチームを紹介し、対戦させられればと思った。上海人チームの知り合いに自分の考えを伝えると、かなりの興味を示してくれた。

一念発起して、対戦実現に打ち込んだ。上海にある日本人のチームの連絡先を探し、対戦申し込みを送った。「相手が受け入れてくれるといいな」と期待しながら返事を待っていた。

しかし、結局、なしのついでだった。「やはり私の発想は現実味が薄いのだろうか」と暫く落ち込んだ。テレビでは、いまでも見え透いた嫌日ドラマが流れている。日本を冷静に見る人が大多数でない限り、日本人の私たちへの不信感をなかなか拭いきれないのではないかと。誠意を持って中日交流のために声を嗄らしても、そのようなテレビの音でかき消されて、聞いてくれないのも無理もないだろうかと思った。

そのような悲観を一掃して、再び希望を見出したのはその一か月後だった。

私はあるソフトボールチームに入った。偶然だったが、そのチームのキャプテンは、なんと日本人の女性だった。練習や食事のとき、彼女がチームメートとお互いにからかいあったり、悩み

を打ち明けたりする様子を見ていると、とても「外国人」だとは思えなかった。「中国人と日本人はこれほどの関係になれるんだ」と心に大きな波紋が生じた。「上海で家を買って、ずっと住み続けたいと思う」とキャプテンは語る。まだ独身のキャプテンに一生を託すことのできる友達が見つかったからこそ、このような希望が生まれたのだろうと私は思った。

この出会いの後、自分の身に翻って反省した。キャプテンが中国人に親近感を持たれているのは、言語の習得のほかに、相手の人間性や機微をよりよく理解する繊細さがあるからだと感じた。振り返ってみれば、自分の対戦申し込みなどはいかにも無茶だった。私は率直な気持ちでメールを送ったつもりだったが、パソコンの向こうにいる相手は、ぶしつけな申し出に感じ、困ってしまったのかもしれない。これまで私が接してきた日本人たちと同じように、内気な人だったのかもしれない。信頼関係は徐々に築き上げるものであり、否応なく押し付けられていると感じられれば逆効果となるのだ。そして、着々と人脈を広げて厚い信頼を寄せられた坂本龍馬のような人物になった自分を思い描いた。

147年前、犬猿の仲だった薩摩と長州は坂本龍馬の斡旋によって手を結んだ。一衣帯水を隔てた中国と日本は、地図で見れば、かつての薩長のようだ。お互いに過去を乗り越えて「同盟」を結ぶことこそが中日のあるべき姿だ。上海市に長期滞在する日本人は6万人弱を数えるという。その彼らが、隔絶した「日本人社会」という行動範囲を踏み出し、現地の人との触れ合いができれば、両国国民間の相互理解の大きな一歩にもなるだろう。一民間人として、私も龍馬を手本に、私自身ができるちいさな同盟の実現のために貢献したいと強く思っている。

またじっくり「プチ薩長同盟」の案を練り直そう。21世紀の中国で、壮大な同盟を再現させることを夢見て。

アニメと漫画で、私達と日本は繋がる

北京理工大学珠海学院 侯婉興



初めてアニメを観た時は何時だろう。まだ私が小さい頃で、テレビ画面にキラキラが走ったり、踊ったりするのを見た。今から覚えれば、アニメが私の目を引くのはあの時からだろう。

最初に観た日本語のアニメは、まだ記憶に新しく、人形に関するストーリーだった。華やかな洋服を着る美しい人形達、そして、苧の枝が青い淵に伸びていて、赤い薔薇と人形の精緻な顔と共に水面から浮かび上がる映像の美しさに夢中になった。それから日本のアニメと漫画が大変好きになった。

今まで沢山のアニメと漫画を見た。見ているうちに、日本のアニメと漫画は奇妙だなと思った。時には新たな世界が目の前に現れるとか、未知の生物が未来から来るとか、日本人の想像力、創造力には感心した。この素晴らしい世界で、私は旅に出た。振り返ると頭の中はアニメと漫画の収穫で一杯だった。

好きなアニメと漫画は多いが、どうしても一つ選ばなければならないのなら、私は「鋼の錬金術師」を選ぶ。幼き日に最愛の母を亡くした兄、エドワードと弟、アルフォンスは母を生き返らせようと、錬金術の禁忌を犯した。しかし、錬成は失敗し、エドワードは左足と右手、アルフォンスは軀を失った。兄弟は元の軀を取り戻すため、旅に出るというストーリーだ。私を強く引きつけたのは、このユニークな構想だけではなく、この物語の人情だ。例えば、エドワードとアルフォンスの兄弟のよしみ、大佐と准将の友情、人類七つの罪を表す七人のホムンクルス（人造人）と人類の複雑な感情だ。私はストーリーの世界に入り、笑ったり、泣いたりする。この物語が私達に教えたいのは錬金術の最大原則「等価交換」で、何かを手にするには、何かを犠牲にする。エドワードとアルフォンスはこの原則を破ったから、酷い目に会った。このアニメを観てから、

私は近道など一切考えず、しっかりと勉強して、仕事をして、努力をしたい。その努力に相応な結果があると信じていたいからだ。

日本のアニメと漫画に感動したのは私だけではなく、大勢の中国人もそうだ。こんなミニブログを見た。「アニメを見ないから、”夢”とは何かを知らない。「愛」はどれだけ大きな奇跡を起こせるかを知らない。例えメールを千回送っても、心の距離は1cmも近づかないことも、愛する人の為に、何時までも待つこともを知らない。」など、長い文章のミニブログだった。日本のアニメと漫画が私達にどれだけ感動を与えているか言わなくても分かるはずだ。

もちろん、日本のアニメと漫画は私達に感動させるだけではなく、影響も与えた。例を挙げて見る:日本の漫画に深く影響を受けた中国漫画家は数多くいる。また、日本の漫画は、子供に漫画を描く興味を深め、漫画家になりたいと思わせる効果もある。私もその影響を受けた一人だ。子供の頃からアニメを見て、漫画を読んで、私は漫画を描く事が好きになり、いつしか漫画家を目指して、毎日頑張っている。もう一つ例を挙げて見る:日本語を勉強している人達に「どうして日本語を学びますか」と聞くと、「日本のアニメや漫画が好きですから」という答えは多いだろう。アニメと漫画は中国人が日本語を学ぶ大きなキッカケの一つになる。そう考えると、両国の文化交流が一層深くなったのではないだろうか。アニメと漫画は中日交流の架け橋の一つになるといっても言い過ぎではない。

中日交流の架け橋として、両国はアニメーション産業にも合作がある。例えばアニメーション映画に「三国演義」、「阿童木」がある。また、中国アニメ「魁拔」「象棋王」この二つは制作に日本人が協力している。その他、日本出版社と契約を結んだ中国漫画家もいて、日本でも人気がある。これらの事は中日友好には大変役に立つ。アニメと漫画は媒体として、中国と日本が繋がっている。今後もさらに両国の相互協力のチャンスを見つけ、実現できるように願っている。

日本のアニメと漫画は日本の文化代表の一つで、私達を感動させ、影響を与える素晴らしい魅力がある。中国と日本がアニメと漫画の協力で、両国にとって文化交流のいい方法であり、友情の絆になって、お互いに文化発展を促進することが出来たら大変良いと思う。私は、アニメと漫画が好きだから、この中日交流の架け橋がより長く、より堅くなるのを心から期待する。そして、何時か私も中日の架け橋になれるようなし仕事をしたいと思う。

(3) 三等賞

中日の未来のために私たちが出来ること

吉林化工学院 王婧瑶



「中日未来のために出来ること」という話題を聞いたかと思うと、背があまり高くないし、美人でもなんでもないけれど、豊かな経験を積んだ日本女性—奥山先生というやさしい笑顔が目の前に浮かんできたような気がする。なぜなら、彼女は一人でランドセルを背負って、世界の多くの国へ行ったことがある。いや、異文化コミュニケーションに身を置いたここ数年来、自国の伝統文化を世界の多くの若者に伝えようとしているからなんだ。そして、幸いなことに、私はその学生達の一人にな

ったのだ。

愛情のカード

私は言語音痴な子だと思っていた。日本語を勉強し始めた時、仮名を覚えるのが苦手なので、一か月でも4つの仮名しか覚えなかった。最初、奥山先生に仮名の発音を教えてもらった。でも、授業が終わったら、仮名をすんなり言い出せる学生は多かったのに対して、私は全然できなかった。悲しみや焦りという気分は言うまでもなく、その時、自分がやっぱり駄目だなという疑問を抱くようになり、頭の中を諦めようという念さえちらつかせて、なかなか消え去らないような始末だ。その場合、先生が人の腹を読む術があったらいい。言葉が通じないから、お互いに英語で話し合うよ

りしかたがなかった。「what's wrong?」と先生が聞いた。「I want to give up, I'm too stupid to have the language talent」と私はきっぱり言った。「come on, girl」と先生がにっこりしていた。次の日、先生は私の机に立ちとめて、仮名が書かれてあるカードを数十枚渡ししながら、「人によって、新しい知識を受ける能力が全然違うから、王さんは王さんなりに努力し続けばいい。人の優劣さは他者との比較で、決めるものじゃなくて、自分の中で決定されるものだわ。まして、あなたの英語が上手じゃないか？元気を出して、よく頑張っただね」と励ましてくれた。

そのカードを受け取ると、今までの焦りなどの情緒がすぐ消えていくような感じがするのではないかと、落ち着いて勉強するようになった。それ相応の大きな進歩を取った。その時、もしカードの支えや付き添いはなかなければ、日本語の勉強に夢中した今の私がないと言っても過言ではあるまい。生活を送っているうちに、何かの困難にあったら、やたらに悲しんだり、焦ったりするより冷静にその原因を分析し、解決方法を見つけたほうが肝心だということは奥山先生に教わったものだとも今でもしみじみと感じられている。

奥山先生と付き合い

二年生になって、会話のレベルがアップすると共に、先生と付き合うチャンスも増えてきた。先生は中国語ができないので、買い物をするとき、時々目に遭うことがある。それで、週末、私と同年生の何人かが先生と一緒にショッピングすることになっていた。みんな朝ラッシュ・アワーのバスに乗って、先生のために座を取ったり譲ったり、買い物する時、積極的に売り手と値切ったりしてあげたのだ。夕日が沈んでかけて、私達が歓声を上げて先生と共に寮へ帰ってきたという満足な喜びは一日の疲労を取り除いたようだ。

また、私達は時々先生のお宅を訪ねた。先生の手作りの日本料理を食べながら、日本飲食文化のマナーやら、浅草の舟和、根津のたい焼きといった日本の有名なお菓子やら、日本人長寿の秘訣などの日本人社会生活やら、「わがままな男」や「風小僧と子供たち」といった日本の民間伝説などを先生に聞いてもらった。私達を腹を抱えて大いに笑わせたり、思わず涙をぼろぼろ溢せたりすることもよくある。それで、日本文化という科目をまだ開設しない前、この方面の知識をたくさん学んだ。「それは面白そうね、将来大学院生になったら、日本文化の分野に研究したい」と言った学生もいた。それは先生のおかげだと思っている。

ある週末の夕べ、「ありがとう、皆。私は中国に滞在中、皆のご親切さやお世話になってこそ、寂しくないし、ホームシックを感じないんだ。皆と一緒にいたら、私の青春がずっと残ってる」って先生が話した。幼いせいか、異国で暮らした先生の言ったその言葉に掛かった深い意味が理解しきれなかったけれど、その時、先生の顔に溢れた満足感と幸福感が夕日の下で特別静かそうで美しく見えていた。生活の中でこれらの助け合い、信用、関心と理解があっただけで私達を以心伝心させたりして、異国の家族になれるかもしれない。旅人はその国で自分の帰属感が感じられるというのは何よりじゃないか？

今更、先生は中国を離れてもう2年になったけれど、私達は時々E-mailで連絡している。先生は相変わらず国々を歩んで、日本文化を世界の各地に伝えようとする教育事業に携わっている。日本と世界諸国の友好交流のために黙々と頑張っている。平凡人の偉さというのは、彼女の裏にどれほどの賛美や光の輪があるのじゃなくて、平凡の職場でどんな偉いことをしているんじゃないだろうか？今日は、この「中日未来のためできること」という質問に答えさせたら、奥山先生のように、教育事業に従事するつもりだ。二年前、その方がひそかに私の世界に潜ってきて、勉強の真諦を教えたり、異文化の面白さを味わわせたりしてくれたことがあるのだ。今、私はまだ若くて、知識がしっかりしないにもかかわらず、奥山先生を手本として精一杯歩き続け、日本語と中日両国の文化

をよく勉強し、立派な中日文化メッセンジャーになろうと力を尽くしたいと思っている。友愛と真剣な心を持って、もっと一人でも多くの中日両国の若者に異国文化の姿や魅力を了解させるために、生活にお互いに助け合ったり、学習にお互い励まし合ったり、肩を並んで素晴らしい中日未来が創れるように頑張ろうではないか。

中日の未来のために私たちが出来ること

北華大学 董欣欣



日本文化を勉強するとともに、日本に関する知識も豊かになった。長い歴史の中で、中日の関係はとても微妙だと思う。中国と日本は一衣帯水の隣国として、競争はもちろん、ウィン・ウィンに向けて、一致する点を求めて、両国の協力もあちこち山ほどがある。中日の友情も輝かしい花火のようにますます深くになった。

皆に知れ渡っているように、2008年四川大地震の中で、日本国際救援チームは被災地区へはじめ駆けつけるのだった。そのときに、日本国内で、日本救援ボランティアは四川の再建するために、全社会に向けて寄付を募って罹災者を救済する援助を強く呼び掛ける。横書きの布に「唇がなくなると歯も寒くなる、心を合わせて地震と戦う」というスローガンが書かれている。日本のコンビニやスーパーなどその店の前で寄付を募る箱が設けている。その時、日本のレストランで、店の主人と店員は中国人にあった時、必ず「四川はどうですか？私たちは四川のことがとても心配しています、もっと多くの人々が配ればいいです」と言う。それを聞くと、私たちの中国人の心はすぐに暖くなる。

今年61歳を迎える井村雅代氏は日本及び世界のシンクロナイズドスイミング界における伝奇的な人物だ。「日本シンクロの母」の名に恥じない活躍を見せた。30年以上にわたってシンクロのコーチを務め、かつて日本では無名だったシンクロスポーツを知名度の高い競技へと発展させた。北京五輪の開催前、井村氏は様々な意見がある中、中国代表チームの監督に就任した。その後、上海で行われている水泳世界選手権に至るまで、井村コーチ率いる中国チームは絶えず新たなブレイクスルーを果てし続けている。

中国シンクロが自らの地位を築いた。彼女は、中国選手達を自分の娘のように可愛がった、ロンドンへの出発式荷は、選手達にスカーフを巻き、「自分の最も美しい一面を見せるのよ」と励ました。しかし、私たちが真に心を打たれたのは、スポーツとは関係ない部分だった。2008年に日本で「ギョーザ事件」が起きた後、マスコミ各社の北京特派員をマンションに呼び、「皆さんは中国に長くいらっしゃるの、真の中国をご存知でしょう。ありもしない噂ではなく、真実を日本に伝えてください」と呼びかけた。61歳の井村氏にとって、スポーツはとくに国境を越え、競争を超えた。中日友好関係のために、自分の全力を出し尽くす。

体育界で、福原愛は「天才卓球少女」、「泣き虫愛ちゃん」中国でのニックネームは「瓷娃娃」こと福原愛選手は、中国国民から広く愛されている。中国人は彼女のことが好きな理由、彼女は素晴らしい中国語が話せるだけでなく、彼女は中国ファンで特別な気持ちを持っている。四川大地震の時、福原愛は自分の財産を寄付する。そして、地震の被災地区の子供たちが励ます。

中日両国の友好の道はまだまだ長い、このようなメールマガジンは、友好の道の途上で出会う美しい景勝地であるに違いない。中日交流協会の若者たちは、彼らの情熱と叡智によって、中日両国の友好的交流のために新たな橋をかけようとしている。彼らに心からの祝福を捧げたいと思う。

歴史という大河の一滴として

嘉興学院 蘆璐璐



現在の中日関係は、1972年の中日国交正常化以来最悪の状態であると言われて
いる。中日関係はこれからどうなるのか。このことは両国の政府関係者だけに任せ
ておけばいいという問題ではない。両国の国民自らが考えなければならない問題で
あると私は考えている。

私は一人の中国人として、今後の中日関係がよりよくなることを心から強く願っ
ている。しかしそれはかつての中日間の不幸な歴史を忘れてもいいということでは
ない。そうかと言って、現在においても多くの中国人が過去の歴史にこだわり、日本や日本人を
嫌っているという事実があるが、それは余りにも心が狭いと言わざるを得ないのではないだろう
か。私も一人の中国人として、かつて日本が中国を侵略した歴史というものを決して忘れること
はない。しかしそれは日本との関係を悪化させようとか、日本との問題を戦争で解決しようとか
いうことにつながるものではない。いや、反対に、そのような不幸な歴史を再び繰り返さないた
めにこそ、過去の歴史を忘れてはならないと考えているのだ

では、一人の中国人として、一人の大学生として、私に何ができるだろうか。

私は、今、日本語専攻の学生として大学で日本語を学んでいる。一つの言語を学ぶというこ
とは、ただ単にコミュニケーションの道具として言葉を覚えればいいということではない。それは
その言語の背景にあってその言語を生み育ててきた社会や政治、経済、生活習慣や思考様式、歴
史といった、すなわちその言語に特有の文化そのものを学ぶということである。私自身、日本語
を学び始めるまでは、特に日本に関心をもっていたというわけではなかった。しかし、日本語を
勉強するにつれ、そして日本から来た日本人の先生たちとのふれあいが増すにつれ、私はどんど
ん日本や日本人が好きになっていった。そういった私の体験から言うと、現在の日本や日本人を
知らずに、あるいは一部の日本の政治家や国民の言動だけを見て、一方的に非難するというのは
偏狭に過ぎるのではないだろうか。私は、今の困難な中日関係の中においても、かつての侵略の
歴史を心から反省し、両国の平和的な関係と両国民の友好関係が発展することを願っている多く
の日本人がいることを学んだし、私の身近にもそのような日本人がいることを知っている。ただ
残念なことは、そのような平和と友好を願う人々の思いが言語という壁のためにうまく結びつい
ていないということである。しかしまさにそこにこそ、私たち日本語を勉強している学生の活躍
の場が用意されていると私は考えている。

現在のような状況においてさえ、中国には多くの日本企業が工場や事業所を展開しているし、
観光で中国を訪れる日本人もたくさんいる。また日本人の先生から聞いた話では、「三国志」や
「漢詩」など中国の歴史と文化を好む日本人は少なくないという。このような仕事や旅行で中国
を訪れた日本人に、日本のテレビや新聞などがあまり紹介しない本当の中国と中国人の姿を紹介
し、中国の魅力を知ってもらうこと。そのような民間における交流をどんどん進めていくこと。
それが私たちにできる、また私たちにしかできない仕事ではないだろうか。

そう考えると、今すぐにはできないかもしれないが、わたしたちの未来はいろいろな可能性に
溢れている。たとえば、観光ガイドとして日本人観光客に国内を案内して、中国の歴史や魅力を
紹介することもできる。わたしは、中国の美しさを日本人観光客に伝えたいし、たくさんの人に
我が国のことを知ってもらいたいと思っている。あるいは、日本企業で働く通訳として現在の日
本社会をより深く理解しながら、日本人と中国人の間のコミュニケーションがうまく進むよう
に努力することも大切な仕事だ。あるいはまた、中国人に日本語を教える日本語教師として、日
本語はもちろん、学生たちが日本のことをよく理解し中日の友好を深めようという気持ちにな
るよう教えることも魅力的な仕事だ。また、これは仕事ということではないが、多くの日本人とメ
ールを交換し、互いの情報を伝え合うことで相互理解を深めることもできる。

このような活動は、日本語を専攻したわたしたちにしかできない、またわたしたちがぜひともしなければならぬ、言わばわたしたちに課せられた使命とでも言うことができるだろう。そして、それぞれの交流のあり方がもとになり両国国民の相互理解がより深まることだろう。そうすることで、両国の未来に一筋の光が、今の暗闇を溶かすような春の光が、降り注いで来るのではないだろうか。わたしもそのような責任ある立場の一人として、もし機会があったらぜひとも日本へ行き、日本で見聞したことを今度は中国の人々に伝えたいと思っている。

最後に、中日両国は先ごろの数十年間を除いては、二千年以上にわたって友好的な関係を保ってきた。そして中国の進んだ文化を採り入れることで日本は文化を発展させてきたし、文化的な共通点も多い。大きな歴史の流れから見ると、現在の困難も永遠に続く解決不可能なものではないと確信をもって断言することができるだろう。それだからこそ、私たちに、私にできることはほんの少しの小さなことに過ぎないかもしれないが、歴史という大きい流れの中の一滴として、そしてその一滴一滴が集まり重なって大きな流れ、大河の流れになるように、わたしもまた歴史の示す方向に向かって小さな一歩を進めていきたいと願っている。

「中日の未来のために私たちが出来ること」

忘れられないボランティア

五环国际劳务合作公司 趙淑晶



2012年8月20日、私は永久に忘れることができない日です。それは私の人生で最も有意義、感銘の日です。これによって私の人生観が変わりました。すべての物事がその日から変わりました。

半年前、今年の8月に一緒に包頭の恩格貝へ行って植樹することを日本人の「三島緑の会」NPOの会長である小島さんと約束しました。大連市開発区加美外国語学校の代表として、この活動に参加しました。私は毎日その日が来るのを楽しみにしていました。私と娘は8月18日に大連を出発して北京に着き、20日に小島さんをふくめて「三島緑の会」の会員さんたち、11名と合流しました。あの時はお天気がよくなかったため、飛行機が遅れ、夜10時頃出発して11時半頃包頭に着きました。空港には包頭旅行会社のガイドさんが迎えに来てくれました。もう夜遅かったので、急いで手続きを済ませてからホテルで休みました。本式の活動は21日からスタートでした。

翌日、私たちは大型バスに乗り美しい恩格貝に向かいました。途中、これまでに見たことのない緑の大草原を見ることができました。この気持ち、この素晴らしさに酔いしれました。大草原の美しさはよく皆から聞いていましたが、自分の目で見たことがありませんでした。あるとすれば、テレビや映画の中の風景ですが、今、現実にこの青々とした大草原を目の前にし、私の心は既に一羽の愉快的な小鳥のようにバスの外へ飛び出ていました。

恩格貝に近づくと、一面の緑は荒涼とした砂漠に変わっていきます。ああ、私たちの木を植える場所はここにあるのでしょうか。砂漠と言えば、人々に恐怖や災難をもたらします。毎年春になると、黄砂が強風によって上空に巻き上げられ、国内の広い範囲に飛散し、しかも太平洋を渡り日本などの国々にまで被害を及ぼしています。このため国家、更には全世界に呼び掛けて黄砂対策を始めています。バスの移動につれ、本物の砂漠が見えてきました。テレビで見たのと同様に、連綿とした砂丘の起伏を見ることができ、風による痕跡もはっきり残っていました。砂漠は怖いけど、この素晴らしい自然美。ああ砂漠、私は来ました。今日はやっとあなたに真正面から向き合えました。最も美しく、最も不思議で、空あんなに藍青で、手で触れるようで、天際に近づいてきたという感じがします。

砂漠に入ると、周りに人が住む家はなく、建物はわずかです。あれは多分樹木の保護者たちの宿舎だと思います。バスの中で説明を聞いて分かりました。ここの砂漠は22年前、遠山正瑛さんという日本人が大学教授を退職した後に来て、黄砂の調査と研究を始め、彼の努力で黄砂を制御できるようになったのです。その後、遠山先生の意志を継承した大勢のボランティアが、この地に来て植樹をしています。ボランティアの皆さんは、色々な地方や国々からこの遠い砂漠に来ています。しかも政府などからの補助金はなく、全く自費で。

今回私は三島緑の会の皆さんと一緒に来ましたが、この三島緑の会はすでに8年間継続していて、今回が9回目だそうです。私は中国の国民の一人として、とても恥ずかしいことですが、今日初めてここに来ました。この景色を見て、微力を尽くし、協力したいと思いました。

砂漠に到着し、バスから降りて植樹の準備をします。彼らの動きは素早く腕利きで、道具の準備など熟練の動作を見て感動しました。特に私たちのグループに86歳の老人がおり、彼はみんなと同じように道具を持ち、仕度を整えて出発を待っているのです。

砂丘を一つ越えて私たちの作業地に着きました・ここは既に緑に覆われはじめ、8年間でこの砂丘は、緑の大地に変わりつつあります。また、全ての小樹に創始者のネームプレートがか掛けてありました。砂漠に一つ一つ穴を掘り、水晶のような汗をかきながら苗に水をやり、土寄せします。早く大きくなれと祈りながら。これらの作業の様子を見て、私は又更に感動しました。日本人の仕事に取り組む真面目さ、執着の精神が勉強になります。そして樹木の間でお互い仲良く助け合っている姿に心を打たれました。

私達は 恩格貝に2日間滞在し、苗は全部で350本を植えました。作業を終えて現場を離れるとき、自分の労働成果を見て、非常に嬉しく安心しました。夕食後、突然誰かが「砂漠で夜空をみよう」と言い出し、10時頃バスに乗って砂漠に行きました。みんな砂丘の上で仰向けになり、美しい星空を見ました。星はとても近くに感じ、この美しい夜空の下で互いに話したい、世界の平和を願いました。

恩格貝を離れる時、私は大きく手を振って「苗ちゃん、来年チャンスがあれば又来ます、あなたはすくすくと成長し、万民の生活安定の為に自分の力を尽くしてください。」

8月23日の夜、私達は飛行機に乗って瀋陽に到着、ここで一日観光しました。瀋陽の故宮、博物館などを見学しました。飲茶も味わいました。瀋陽は古い街のため、古い建物、文物や古跡がまだ残っていました。

8月25日の午後、私達は電車に乗って美しい海辺の都市、大連に戻ってきました。夕方に到着したので観光はなく、テレビ局のインタビューを終え、日本からのお客様である三島緑の会の皆さんを歓待しました。

三島緑の会の皆さん、一人の中国国民として、あなた方に感謝します。中国の砂防への巨大な貢献に対して感謝、素敵な大自然の景色を見られて感謝、私や私の娘に明るい未来と希望を頂き感謝。

私達はこの感謝を言葉に表現することができません。本当にありがとうございました。

(4) 優秀賞

双子の共感

北京第二外国語大学 孫少凱



私には双子の妹がいます。ただ不思議な事に、顔は全く似ていません。性格も好みも違うし、似ているところはほとんどありません。幼稚園からずっと一緒でしたが、大学入学を機に、二人はそれぞれの別の道を歩みはじめます。妹は憧れのアナウンサーを目指し、地元の大学でメディア関係を専攻し、一方、私は地元を離れ、地方の大学で日本語を専攻することになりました。このように全く異なる進路を選

んだ二人でしたが、後に二人はまた同じ夢を共有することになっていくのです。エピソードは大学一年にまでさかのぼります。

冬休みのことでした。家に帰って、机に向かってのお勉強はどれも気が進みませんでした。ある日、日本のドラマでもみようと思って、『1 リットルの涙』を見ることにしました。当時、妹は日本のことにあまり関心を持っていなかったため、ドラマは私一人で見ることにしました。感動して涙を流している私を見た妹は「鬼子のドラマなんか見て、なんで泣いてるのよ。正月早々、縁起が悪いわ。」と言いました。私は「一話でもいいから、一緒に見てみない。いいか悪いのかは自分の目で見て判断してみてよ」と伝えると、妹はイヤイヤながらも付き合ってくれました。そしたら、妹も主人公の前向きで精一杯頑張る姿に、確かに感動していた様子でした。しかし、「どうだった、鬼子じゃなかったよね」と私が聞くと、妹は「うん」と答えただけで、その場は特に何もお互い話をしませんでした。

数日後、新学期がはじまりまもない時のことです。なんと、妹から「手紙」をもらったのです。正直、驚きました。なぜなら、私は人生で一度も「手紙」などもらったことがなかったからです。しかも、手紙の差出人と一緒に育った実の双子の妹です。手紙には妹がああ『1 リットルの涙』から大いに影響を受けた様子が書いてあり、大学校内のラジオ番組で、なんとその内容を彼女が紹介したというのです。

「ここ中国から海を隔てた遠いところに、病魔と闘う十五歳の少女がいました。……その国とは日本です。」

たった一本のドラマが、私の妹の心を変えたのです。現在、地方のテレビ局の女子アナウンサーとして活躍する妹ですが、それ以来、日本のことが好きになったようです。先日『感動 教師』という地方番組で『ALWAYS 三丁目の夕日』という日本映画の主題歌を用いた際、視聴者から大きな反響があったそうです。

私は現在、修士課程に学ぶ院生ですが、将来は日本の大学院に行って博士課程に進学したいという願望があります。ただ、農村に育った私は、その資金を両親に頼ることはできません。ですが、ある日、そのことを知った妹が「お姉ちゃんが日本に留学することは私の夢よ。」と言ってくれたのです！

これまで、中日友好の架け橋や外交官になるとかいった大きな夢を抱いていなかったごく普通の私に一体何ができるのか、ずっと悩んできました。そばにいる妹に起きた小さな変化は、私に大きなヒントと力を与えてくれました。数十年前の侵略時代の日本のイメージがいまだに根強い中国ですが、このような日常という中におけるごく小さな感動が共感へと広がりを見せることで、やがて大きな力となり、中日両国民の心の距離を大幅に縮めることができるのだと信じています。このような障壁は決して敷居の高いことではないことを私と妹との小さなエピソードが示しているのではないのでしょうか。

中日の未来のために私たちが出来ること

天津外国語大学 滕春萍



チベットにあるヤルンツァンポ川で、こんな話があった。この川は自然的に出来た険しい崖と激しい流れのために、昔からここに橋を架けることはとても困難であった。しかし、その地域の人々は、藤のつるで橋を架けたり、綱でロープウェーを作ったりして、このようにいろいろな知恵をしぼって、橋を使い山の外の世界を見に行く。中日の間の交流もそうだ。行く道を妨げるものがあるが、中日両国民の知恵をしぼって一生懸命に友好交流の「橋」を架けるならば、良好な中日関係を促進

していくのも決して夢ではない。

情報化時代のおかげで、ネット上には、日本文化を了解し、日本人と交流するチャンスも増えている。わたしもその恩恵を受けオンラインの交流を通して日本人の友だちできた。互いの文化に好奇心や好感を持っているから、ディスカッションしているうちにコンセンサスを得る場合も多い、どちらに対しても楽しい経験だ。

もちろん、ネット上の交流のほかに、現実生活に双方向・多様な交流も重要な役割に立つ。

日本語学科の学生として、日本人と交流したり、いろいろな場面で日本を理解したりするチャンスが多い。民間友好交流は実に中日関係を促進する一番大切な手段だということをしみじみと感じられる。日本語学習者であるわたしたちは民間交流の最前線にいるといっても過言ではない。学んだ日本語で、さまざまなことを理解できる上に、日本の文化理解も出来るようになる。学部生だったとき、久保先生というやさしい日本人の先生と親しくなり、いつも話し合ったり、食事などをしていた。先生との交流の中で、私のなかには日本人の生活習慣・考え方などに新しい発見や気づき生まれ、それと共に日本文化への理解も一層深くなっていった。日本で選挙（衆議院・参議院）があったとき、先生はわざわざ中国駐在大使館に手続きをし、日本から投票用紙を受け取り、真剣に投票用紙に記入し国際速達郵便でまた日本へ送っていた。日本人にとって、これはただ日常生活の一部に過ぎないのだろう。しかし、先生の行動は中国人の私にとって、衝撃を超えて、信念とか正義とかたくさん素晴らしい考え方を私の生活に与えてくれた。

昨年九月、釣魚島事件で中国全国が騒がしくなって、TVニュースにも新聞にも反日デモの報道があふれていた。私が住んでいた小さな街までも反日デモが起こった。丁度この時期にクラスメートの6人が日本に留学していた。中国にいる家族が彼らの身の安全を心配して、不安を抱えながら電話をかけて状況を聞いた。しかし、思いがけなくこの6人のクラスメートは国内での反日デモのことをあまり知らず、「周りの日本人もいつものように暮らしている」と教えてくれた。その6人中ひとりである王さんが、日本料理店へ食事しに行ったときに、食堂の店主は王さんが中国人ということを知った後でも、差別するどころか、かえって、親切に名刺をくれ中国で働いている自分の息子のことについて話しをしてくれたという。この話を聞いて、中国にいたクラスメートは驚いたというより衝撃を受けた。なぜなら、国内のデモで日本の会社やレストランや人が中国人から野蛮な行為をうけていた。このことを知った日本人は中国人に仕返しをするのではないかと私たちは思ったからだ。

中日関係が緊張したとき、日本人作家の村上春樹氏は『魂の行き来する道筋』という文章を書いた。この『文化の交換は「我々はたとえ話す言葉が違って、基本的には感情や感動を共有しあえる人間同士なのだ」という認識をもたらし、一つの必要な目的にしている。』という話しを読んで、中日交流について村上さんが述べた考えにとても共感を覚えた。更に、釣魚島事件について、村上さんも次のような目の覚めるような言葉を書いた。『「我々は他国の文化に対して、たとえどのような事情があろうとしかるべき敬意を失うことはない」という静かな姿勢を示すことができれば、それは我々にとって大事な達成となるはずだ』。確かに、もし我々は敬意を込めている姿勢で交流すれば、感情や感動の共通点も発見し、さらに互いの文化への理解も増進することができる。

目下のところ、我々は何国人というより国際人としての覚悟が持つべきだと思う。国際人の視点にたてば、ただ自分自身あるいは自国のことを考えるのではなく、「自分の身の回りから、自分だけのためではなく他人のために行動する人びとの連帯を、粘り強く広げる」というように行動実践していけるのではないか。わたしは「自他共の幸福を築く」という言葉が好きだ。ひとりの力は小さいが、同じ信念のある人々の力をあわせ、寛容・理解の根底に据えて中日友好交流を促進していけば、きっと「自他共の幸福」を築くことができる。

中日の未来のために私たちが出来ること

大連工業大学 楊晶晶



もし、私たちの暮らしの中に「いただきます！」というひと言がなくなったとしたら……。実はこの言葉から日本語の勉強を始めた私は今、そんなことを考えています。

一年生だったある日のこと、私は日本語の先生と一緒にお昼のご飯を食べました。注文したものがきて箸を取ると、先生はかなり大きな声で「いただきます！」と言いました。真面目な顔でいう先生の態度に驚いて、「先生、日本人はみんな食事の時に、必ず『いただきます！』と言いますか？どうして？」と、好奇心の強い私は聞きました。先生は笑いながら、「日本人にとって、『いただきます！』という言葉は『ありがとう』という意味があんだよ。だから、日本人は自然に出てくるし、食事を用意してくれた人に向けた礼儀というよりも、これから口に入れる食べ物に対する感謝の気持ちが強いんだよ。これはもう日本での決まりの言葉になった。それをよく勉強してね。」とおっしゃったのです。そこで私は先生に合わせて、食べ終わったあと、明るくはっきりと感謝の気持ちをこめて「ごちそうさまでした！」と言いました。実は、私たち中国にはこのような習慣がありません。私は先生にこの話を聞いたあと、考えてみました。

私は自分でも感謝の言葉がすごく足りないと思っています。母の日や父の日でさえも、親に感謝の心を持ちながら、「ありがとう」という言葉を口に出すことができません。日本人が日常生活の中でたくさんの感謝の言葉を言っているのに比べて、とても恥ずかしいです。私のように感謝の心を持っていても、言葉に出すことを恥ずかしがる中国人が多いのではないのでしょうか。私のような人たちは一度反省すべきではないかと思います。必ずしも日本人のように食事の前に「いただきます！」と言わなくても、親の誕生日のときや、先生に教えていただいたときや、友達が助けてくれたときなど、感謝の気持ちをすぐにはっきりと言い表すべきではないかと思います。

中国と日本には、違う文化がたくさんありますが、優れたところをお互いに学ぶことが必要だと思います。そして、中日の未来のために、若者としての私たちが出来ることは中日両国の言語のレベルを高め、中日両国の文化を学びながら理解して、またそれらの優れたところを受け継いで伸ばして行って、中日交流の架け橋となって貢献すべきではないかと思っています。

そこで、これからの私は、食事の前には必ず「いただきます！」と言おうと思っています。

納豆を笑う門にして中日友好の福を迎えよう

東北林業大学 周慧芸



日本には絆という言い方があります。中日は本来一衣帯水の隣邦であり、文化的にも多くの共通点がありますので、中日の人民にはこの深い絆で不可分の関係があると言えます。

先日ある店で、“ああ、これは……”と私は驚き、棚の上に小さい箱を取り出しました。これは日本人が非常に好きな納豆ではないでしょうか。日本では、豆は何よりも掛け替えのない地位にあるように見えます。豆に対する最初の印象は日本のテレビで見た「豆しば」です。ある豆製品の包装を解くとこの可愛い小豆に出会えます。彼は目を丸くしてかわいい声でそっとあなたに“ねえ、知ってる？”と豆知識を一つ教えます。でも、彼らはあなたが小豆を食べる時に「イカは心臓が三つあるんだよ。」というような話を教えて食欲が全然なくさせます。元々日本では豆は愛嬌と誠実の代表です。道理でそんな嫌な話を聞いてもまだこの素直でかわいい豆がすきなわけです。

私もこのような豆に出会えるのだろうか？そう思って買った納豆を持って小走りに家へ帰りました。「いただきます」と私が中の調味料を入れて、箸で混ぜると、たくさんネバネバした糸が出てきました。私は待っていたとばかりに一口食べてみました。その繊細な食感と個性的な味といったらなかつたです。納豆は日本人の生活の中で不可欠な食べ物です。どうして日本人は納豆に夢中なのですか？パックの中の納豆を箸でかき回しつつ思います、私の力ではますます大きくなって、しかし、これらの納豆は微動だにしないし、気にしない。私は急にこれらの小さな納豆を見直しました。日本では豆が大切な役割を務めているのだろう。挫折に直面しても畏縮しない強さや幸せを絶えず求め続けることを体現した強い生命力は、自分の汗と努力で心が求める高さにまで達成されます。人生の真理は、人生の道が平坦であるか凸凹であるかではなく、精神的に強いかどうかにかかっています。道理で正月に、願いを込めて黒豆を食べながら「まめまめしく暮らせませうように」と言うわけです。私たちがきっと中日平和の道の凸凹を越えていくでしょう。

私が箸で混ぜると、糸はもっと多くなり、本来はばらばらだった豆がつながりました。あ！これこそ日本人がこんなに納豆が好きな理由でしょうか！人間も納豆のようにお互いに支え合って生きて行くものです。一人では、小さくて取るに足りない、でも彼らが一旦みんなで団結すれば、強い力が爆発して、大きなことを成し遂げることができます。これらの糸は、日中文化の交流も二つの国の国民も繋ぎ合わせます。日本には以心伝心という言葉があります。一つ目付き、簡潔な言葉だけで、日本人はすぐに心が通じますが、簡単な「はい」が多くの場合、単純な「はい」ではないのが外国人にとって理解しにくいです。だから、交流が中日友好には大切です。

偶然テレビで『また嵐山紅葉の赤を見る』という中日友好条約 35 周年記のテレビ番組を見ました。『雨中の嵐山』は 1919 年に周恩来総理が京都市嵐山を訪れた時に書いたものです。その後、この詩が刻まれた記念碑が嵐山に建てられ、数年来この碑は日中友好を代表するものとして、多くの中国の指導者が見学に訪れています。番組の中では、楽しいテーマ曲と共に、1987 年に 3000 日本青年訪中イベントの時の情景が再現されました。熱烈な雰囲気、濃厚な感情、テレビの外の私も臨場感あふれる番組をみながら日本の友達と心を共にし、歌い合い、踊り合います。心から喜び、「中日青年友好」というスローガンも心にも深く焼き付けられます。今、「中国の夢、私の夢」は中国社会のテーマとして、全中国人民の話題になっています。「中日青年の世々代々の友好、中日両国は世々代々の平和」という美しい夢がずっと中国人民の心に存在しています。中日両国民が心を共にし、歌い合い、踊り合っていたようなシーンがテレビの中だけの記憶ということではなく、このようなシーンが目の前でもずっとずっと続くと私は確信しています。この前、何日間もテレビの前でオリンピック大会開催場所決定の結果をドキドキしながら待っていました。東京でオリンピックが開催されることが決まりました。平和であればこそ、将来の夢を語れると思っています。これもオリンピックの精神の一つでしょう。私は、平和と将来に自信があります。

私たちはこの小さな納豆を馬にして私たちを載せて「中日青年の世々代々の友好、中日両国は世々代々の平和」の夢の場所へ向かっていきます。私たちはこの小さな納豆を橋にして中日のコミュニケーションの（ための）橋を建てます。私たちはこの小さな納豆を笑う門にして中日友好の福を迎え、2020 東京のオリンピック大会を迎えましょう。

中日の未来のために私たちが出来ること

華東師範大学 潘欣慧



「今日はここまでにしましょう。お元気で。」私はそう言って、山田さん夫婦の家を出た。道にさわやかな風が吹いていた。木犀の香りもこもっていた。一人で歩いても、気持ちがよくなった。

私は近くの公園へ行って、そこのベンチに座った。自然の中にいると、なぜか落ち着いてくる。山田さん夫婦との初対面が思い出された。

それは二年前のことだった。ちょうど春の季節だった。日本語の勉強も半年になり、日本人との交流も深めたく、私は何かをしようと思った。先輩が紹介してくれたおかげで、日本人向けの中国語教室で働いている人事課の陳さんと知り合った。これをきっかけに、中国語を教え始めることになった。

教師になることは私の想像以上に難しく、大変だった。中国人だから、中国語の教師になれるとは限らない。私は教科書を工夫して、一ヵ月半もかかって、やっと生徒に教えられるようになった。「明日の朝、九時三十分に山田さん夫婦の家ではじめてのレッスンすることになりました。遅刻しないでください。」食事をしている時、陳さんから電話がかかってきた。それを聞いたら、嬉しくて、目の前にある食堂のまずい料理もおいしくなった気がした。その夜はどきどきして、ずっと明日のレッスンを考えて、眠れなかった。夜明けになってやっと寝た。目覚し時計が鳴ると、私はすぐ起きた。八時になると、寮を出て、駅に向けて出発した。地下鉄に乗っている時もずっと山田さん夫婦の顔を想像していた。

山田さん夫婦の家に着いて、ドアのベルを押すとき、手が汗でぬるぬるしていることに気が付いた。ドアを開けたのは50歳ぐらいの奥様だった。挨拶してから、私は中に入った。奥様は親切にお茶を入れてくれて、「どうぞ、どうぞ」と私に勧めた。こんなに暖かくて、おいしいお茶を飲んで、私の緊張感もなくなるようになった。しかし、私は経験不足か、準備不足か、レッスンがうまくいかなかった。だんだんと、私の顔は真っ赤になって、山田さんの声も聞こえなくなった。「先生、大丈夫？すこし休憩しましょう、お茶を飲んでください。」私は頭を上げて、心配している奥様の顔を見た。二人の優しい目を見て、私は涙が出てきた。こんな優しい夫婦がそんな私を心配してくれて、ありがたい。しかし、私は中国語レッスンすらできなかった、申し訳ない。……

山田さん夫婦の家を出た後、頭に浮かんだのは「もうだめだ」ということしかなかった。その後、山田さん夫婦が来週同じ時間にレッスンをしたいと言っていると陳さんが私に伝えた時、まったく信じられなかった。それから、私は感謝の気持ちでレッスンを続けた。私が上手になるとともに、山田さん夫婦とも仲良くなった。ある日、レッスンが終わってから、初めて会った時の話が出た。「何であの時ほかの教師に変えなかったんですか？」私はやっとあの時の疑問を山田さん夫婦に聞いた。「先生は可愛いからさ、ふふふ、、、」私はそれを聞いて、顔が熱くなった。「先生、一期一会って言う言葉聞いたことがある？人と人ってさ、出会うのが不思議な縁だよ。何の罪もなく、ただ緊張してる先生を見て、そのとき、一期一会って言う言葉を思い出した。それに、先生が自分の本に書いた字も見た、そんなに真面目で、私たちを大切に思ってくれる先生を変えるわけがないじゃない。だから、先生と一生に一度しかない出会いから、長いご縁になって欲しいと思ってね。」山田さんはそう答えてくれた。山田さんの真剣な目を見て、何かが私の心に芽生えた。

それから毎週一回に山田さんの家に行くようになって、ちょうど二年半が過ぎ、山田夫婦も帰国することになった。

「ボン」一つのボールが私の足にぶつかった。「お姉ちゃん、ごめんね。」可愛い子供の声私を回想から呼び戻した。「ううん、大丈夫。」私はボールを拾って、子供に渡して、そう言った。子供はボールを持って、友だちのところに行って行った。

私はベンチに座って、目の前の子供たちがキャッチボールをしているのを見ている。投げる、受ける、お互いに楽しくやっている。なんだか心から穏やかな気分になった。別れの悲しみも浅くなった。人と人の繋がりも、投げる、受けるの二つの動作にある。心を込めて、交流すると距離なんかは何でもない。

「ちりんりん」ポケットの中の携帯が鳴った。「今、大丈夫？ねえねえ、明日事務所に来ない？新しい学生を紹介してあげるわ。」向こう側にいる陳さんの声が耳に入った……。

中日の未来のために私たちが出来ること

吉林華橋外国語学院 解杰



子供の時から、私はずっと日本のアニメに夢中でした。『ドラえもん』などのアニメがなかったら、私の楽しかった子供時代もなかったといえます。アニメの中の人々がいったい何を話しているのか、私にはわかりませんでした。その言葉は美しいと思いました。そして、アニメの画面がとてもきれいだと思います。長い時間をたってから、人物の動作から、人々が何を話しているのか、私にも大体わかるようになってきました。

私が一番好きなのは『ドラえもん』というアニメです。みんなご存知でしょう。ドラえもんは人のように話せるすごいロボットの猫です。どうして彼がすごいかといいますと、彼はいつでも自分の体の袋の中から、すごい機械や道具を取り出すことができます。そして、その機械や道具を利用して、彼の主人の願望を実現させて、主人のことを守ります。この世の中、たぶんそのようなドラえもんなど、実際にはいません。でも、ドラえもんはもう子供たちの心の中に、深く存在していました。

高校を卒業するとき、家族は私がどんな専門を選びたいのか聞いてきました。私は、「日本のアニメが好きだから、私はアニメの中の人物のように、上手に日本語を話せるようになりたい。」といいました。最初、家族はびっくりしました。「なぜ日本語なの。教師のほうがいいんじゃないの。」と言いましたが、私はどうしても日本語を学びたいと言いました。ついに、私は日本語を専攻する今の大学に入りました。うちのクラスでも、私のような人がたくさんいます。みんなは日本のアニメが好きだというだけで、日本語を選びました。そのため、みんなと一緒に勉強することができます。大学に入ってから、私は初めて現実生活で本当の日本人を見ました。うれしかったです。そして、先輩が上手に日本語を話す姿を見ると、将来、私も必ず先輩のように上手に日本語を話せるようになれると信じていました。

今、私はもう三年生になりました。日本語も相当上手に話せるようになりましたが、今も日本のアニメをみます。いったいどうして日本のアニメがそんなに好きなのか、私にもわかりません。多分日本の文化が私を日本のアニメ好きにさせたのかもしれませんが。実は、私は日本アニメが好き理由など知りたくないのです。中国と日本、この二つの国の関係が良いとか悪いとか、戦争があるのかないのか、全世界のほかの人は日本のアニメが好きなのか嫌いなのか、そんなことは、私がアニメを見ることと関係がありません。どうしても、私はただアニメを見たいのです。私にとっては、好きなアニメを見続けるだけで十分なのです。できれば、私は自分が好きなアニメを周りの人に紹介します。たくさんの人に人をアニメ好きにさせたいのです。せめて、これが今、私にできることです。そして、私が好きなことです。

アニメというと、まず日本のアニメを思い出してしまいます。どうしてでしょうか、日本のアニメがとても素晴らしいからでしょう。将来、実は私もアニメを作りたいのです。『ドラえもん』よりもっと素晴らしいアニメを目指しています。放送された後、すぐ全世界、あるいは中国と日

本の人々の心に深い印象を与えるアニメを作りたいと思っています。それはすごく大変かもしれませんが、私の夢ですから、どうしても実現させたいのです。

今、考えているアニメは二人の友達の物語です。二人の名前はまだ決めていません。この二人は大昔からの友達です。彼らは互いに助けあったり勉強したりしてします。しかし、人間だから、時にはけんかも避けられません。その二人も時々けんかをします。大げんかでも小さなけんかでも、その二人が友達である事を変えられません。二人は様々な共通の宝物をもっています。その宝物が二人の間を行き来する間にそれはますます大きな宝物に育っていきます。その中で、二人の平穏な日常、つまらぬことでの喧嘩、そういった日々を描くことで平和の大切さを浮き彫りにする、そんなアニメです。

中国と日本の間には、大きな戦争もありましたが、大昔からの友好的な近隣国です。どちらが悪かったかとかを追求しても仕方ありません。いわゆる天下大勢分久必合合なのだろうと思っています。私のアニメが二つの国の関係をよくさせることに役立てば、と、これは私の夢です。ドラマや小説のように、二人の友達はどんなけんかをして物語の最後は、必ずハッピーエンドです。日本と中国も同じだと信じています。

中日の未来のために私たちが出来ること

四川外国語大学成都学院 黄嘉麟



中国と日本は海を隔てた隣国である。でも、今回のことだけでなく、微妙な問題がしばしば起きている。だから、両国はお互いの関係をどのように良い方向に構築していくべきなのでしょうか。

まず、歴史は未来の鏡だ。

周知のように、近代に入り、日本軍国主義が中国に対して侵略戦争を起こしたことは中国人のわれわれは忘れられない思い出だ。中日友好はその戦争の原因で大いに破壊されたために、われわれはその悲しみが深い歴史を銘記することを強調している。別に恨みを抱き続けたいのではない、中日両国人民は歴史を鏡として未来に向かい、友好的に付き合っていくためです。すでに過ぎさったことだから、美しい未来に目を向かって心の扉を開けて付き合うようにしましょう。未来は若者に所有されるものだから、大学生の私たちは友好のために、出来ることは何でしょうか。相手の歴史や文化、習わしを尊重しながら、日本人の友達とつきあう。中日友好ということを周りの人に伝えて力強い輪となって中日友好のためにがんばりましょう。中日両国の間に問題や意見のくい違いがあったら、落ち着いてよく考えなさい。

これから、今、お互いに理解することは一番大切なことだと思う。

十年前、「今晚新聞」という新聞に書いてあるお婆さんと中国の留学生の間に起きた小さな物語に感動した。その暖かい気持ちはいまでもずっと胸の中に秘めている。

この中国からきた留学生の名前は劉氷だ。1999年、ちょうど中日関係がいろいろな複雑な原因で悪くなった時期でした。それから、日本国内では中国人を排除するブームが起こった。あの冬、雪が激しく降って、大地はすっぽりと白い雪に覆われた。劉さんが部屋を借りられなかったので、街角で困って泣かんばかりだった。その時、一人のお婆さんがやってきた。劉さんのいらしている顔を見て、「何があったの」とやさしく聞いてあげた。原因が分かった後、お婆さんは劉さんを自分の家に連れていった。残念ながら、貧窮していたお婆さんはひどい糖尿病がかり、まもなく入院した。しかし、お婆さんが入院している間に、彼女の息子さんは一回も病院へ見舞うことはなかった。でも、学業もアルバイトもどんなに疲れても、彼女は相変わらず、お婆さんの世話をし続けた。お婆さんはとうとう人生の最後を迎えた。いまわの際に、「私は家族もお金もなく、貧困な祖母なので、今から君は私の部屋の持ち主になった」と言いながら、左手から指輪を取って、劉さんに贈った。これはどうも見た目がぱっとしない鉄指輪なのだ。

時間は一気に過ぎて、劉さんは卒業した後、すぐ帰国した。ある日、友達と一緒に留学生活の世間話をしていた時に、劉さんはそんな不思議な物語を言った。あの友達は必ずその指輪を見せたいと話した。鉄指輪のように見えるが、実は鉄より重いとわかってもらいたくないので、二人は宝物店へ行って、専門家にこの指輪を鑑定してもらった。専門家はある薬剤を使って、その鉄指輪を洗ったが、その上に生じたさびを落とした結果、三人ともびっくりした。指輪の中には星のようなきらきら光っているダイヤモンドがある。

この童話のような物語を読んだ後、いろいろ感じさせられた。特に、お婆さんと劉さんの間に生まれた家族のような感情は、中国と日本との誤解を超えて、ダイヤモンドよりもっと値打ちがある。「劉さんが実に幸運だ」と言う人もいる。でも、私の目から見れば、現実生活の中では多くの人は自分のことを考えているばかりで、目的を達するために、どんなことでもしかねない。劉さんのように、自分を助けてくれた恩人に恩返しを忘れない人がすでに珍しくなった。だから、運命を変えるほどの大きな奇跡はなかなか訪れない。これは人々の人柄次第だ。

日本の茶道文化の中で、「一期一会」ということわざがある。「あなたとこうして出会っているこの時間は、二度と巡っては来ないたった一度きりのものです。だから、この一瞬を大切に思い、今出来る最高のおもてなしをしましょう」という千利休の茶道の筆頭の心得である。千利休の言った通りに、中国人と日本人にとって、劉さんとお婆さんのように、相手を親友と見なして、心の扉をあけて、お互いに理解し合い、お互いに大切にすることがとても重要なのだ。

では、日本語専門の学生としてどんなことをすればいいのでしょうか。

言葉は心の架け橋だとよく言われている。だから、一生懸命日本語を勉強して、日中友好の架け橋になるのが日本語専門の我々の責任だ。例えば、2008年の北京オリンピックはとても成功した。だから、日本はすごく豊富な経験がある中国と交流したいかもしれない。私はきっと喜んで中国の文化、情熱と魅力を日本に伝えたい。一方で、2020年夏季オリンピック・パラリンピック開催地が東京に決まった。オリンピック運動の理念に大いに賛成する私はとてもうれしかった。スポーツこそは世界をつなぐ。そして万人に等しい機会を与えるものがスポーツであると私たちは思っている。だから、その時、私は日本へ行って、日本語がわからない中国の観光客に日本語の通訳をしたい。このような些細なことは中日の未来のために私ができることだ。

とにかく、厳しい冬が過ぎてから、きっと暖かい春を迎え、中日の誤解はきっと冬の氷のようにいつか必ず解けると固く信じている。これはごく小さい私が持っている大きな夢だ。

中日の未来のために私たちが出来ること

福建師範大学 陳立穎



三年前、私は「名探偵コナン」というアニメのおかげで、日本語を勉強する決心をした。この三年間、日本語を通じて、文化をはじめ、経済、社会などを含めて、日本という国をより詳しく知ることになった。日本語の勉強は私にとっても深い影響を与えてくれた。

初めての日本事情の授業の時、先生から中国と日本は一衣帯水の隣国であることを教わった。日本語の勉強とともに、中国と日本の間に深い絆があるとだんだんわかるようになってきた。

しかし、残念なことに、切ってもきれない絆を持っている中日の関係は順風満帆ではない。歴史や政治の問題で、中日関係は何度も堅氷期に入り、民間交流もその都度ピンチに陥ってしまった。

日本語科の学生たちはいわば中日交流の最前線の一員だと言えるかもしれない。それは、日本人先生と不断に交流しているからだ。

私は日本人の先生と知り合ってから、たくさんの思い出を積んできた。おいしい料理と一緒に食べたり、景色の美しい所と一緒に回ったり、さまざまな話題を話し合ったりして交流してきた。私は豊かな大学生活を過ごすことができた。

去年、魚釣島のこと中日関係は厳しくなった。最前線の私たちは「中日が以前のような友好関係を取り戻す日はいつ来るのだろうか」と悩まされた。我々にできることはいったい何か。この問に対して、日本人先生との交流から私はある答えに気づいた。

旅行好きな目黒先生はよくいろいろな所へいく。先生が故郷の漳州にいらっしゃったとき、漳州の夜市を案内した。

初めて出会った賑やかな市場に、先生は目を瞠った。カメラでいろいろ写真を撮りまくった。

その時、ある屋台のおばさんオーナーは「なぜ写真を撮ったの、うちの服がきれいだから？」と聞いた。

「外国人の方なので、物珍しくて面白いと思ったから」と私は返事した。

そのおばさんはまた「外国人に見えないなあ、どこの国の人？」と聞き返してきた。

その時、私は返事に躊躇った。中日関係のうまくいっていない今という時期に「日本人」だということとはとても言えなかった。でも、嘘をつきたくないで、「日本人」と返事した。

すると、「知っている、魚釣島のこと、我々中国人は日本人が大嫌い」とおばさんから嫌な言葉が返ってきた。

このおばさんの言葉について、私の悪い予感がやはり当たった。その言葉に腹が立ってしまった私は、怒りのあまり、つい「それは政治の問題。個人の付き合いには関係がないものだ」と大きな声で言った。

落ち着いて考えてみたら、おばさんの言葉、実は理解できないわけでもない。おばさんと私の考え方には違いがある。私は日本人のいいところをわかっているから、日本人に好意を持っている。しかし、直接日本人と接したことがないおばさんなら、歴史と世論に縛られがちだ。

日本を嫌わないイコール愛国心がないと思いつく世論は一時的に流行っていた。少し過激だと思う。こんな世論に流され、あまり深く考えずに一方的に日本人に悪い印象を持っている人は少なくない。

実は「私たちがしているのは民間の交流で、政治と関係ありません」という言葉はごく普通の中国の銀行員の口から漏れ出した。

私が銀行で実習していた頃のことだった。工作中、日本からの小包が届いた。中には浴衣が入っていた。その場にいた従業員たちは興味を抱き、写真も撮った。その時、誰かが領土問題の話を持ち出すと、その銀行員はぴしゃりと答えたのだ。

初めて普通の中国人からこの言葉を聞いたとき、私は少しびっくりした。でも、すごく感心した。

領土問題を生起させたのは政治家ではないか。政治家のやったことだけで、全ての日本人を否定するのは正しいか。民間交流に政治を持ち込むのはやはり良くないと思う。

私は、日本文化に興味を持ち、中日友好を望みながら日本語を勉強している一人の学生である。政治の世界とは距離を保ちたい。

全ての日本人が政治家ではない。多くの人は普通の人であり、私たちとはただ国籍が違うだけだ。領土問題で、全ての日本人を色眼鏡で見ることはやめたほうがいいのではないか。

我々ができることは、政治問題と民間交流を混同している人たちに「これは民間の交流です。政治の問題と関係がない。混同しないでほしい」とまず教えることだと思う。

確かに、一人の力は非常に限られているが、もし中日友好を望んでいる私たちが一緒に力を合わせたら、堅氷を少しでも溶かすことができると私は信じている。

みんなで心から中日友好を望むのならば、今の状況はきっと変わる。

中日の未来のために私たちが出来ること

蘇州大学 徐郡



去年の夏休みに、私は蘇州大学の代表として、日本から来た立命館大学の交流学生たちを接待しました。一か月という短期交流でしたが、あらゆる出来事がすごく刺激的で新鮮で充実した一か月でした。交流に参加して得られた知識や経験は後の学習にも生かされていて、言葉では表せないくらい本当に良い交流だったと感じました。この機会を通して、ずいぶん日本語を練習することができました。

留学生たちのスケジュールは、中国語や中国文化について、書道や太極拳などの授業も受けます。蘇州や上海や南京などの観光名所へ行き、企業訪問をすることもありました。私は彼らに同行することになりました。彼らと一緒に過ごした生活は毎日が新しいことばかりでした。授業が終わると私たちは学校の近くのショッピングモールやダウンタウンへ出かけ、おいしいものを食べたり、買い物に行ったりしました。中国は、日本より物価が安いので、留学生たちがおいしいものをたくさん食べられます。彼らが普段日本でよく食べている「中華」以外にも、屋台でたくさんのローカルフードを食べました。日本人は中華料理が大好きだということがわかり、私はとても満足しました。

フィールドワークでは上海、南京、そして獅子林などの蘇州の観光名所に行きました。南京虐殺の博物館では、この留学生交流団の団長さんは「日本では見ることのできない中国側の歴史が展示されていて、とても興味深かった。同じ歴史でも、伝える側が違うだけで情報量に差があり、一方の側面だけを見て、判断してはいけないと思った。」といました。この歴史問題は、中国と日本の間に、扱いが難しい問題ですから、最初に皆と一緒に南京虐殺の博物館を参観することを知った時、ちょっと心配しました。しかし、団長さんの話を聞いたら、安心しました。私も初めて南京虐殺の博物館を参観しました。この歴史について、中日の大学生たちが、正しい態度で対応するのを見て、とても感動しました。そのほか、留学生のある学生が中国歴史についての趣味があるため、中国の高校時代の歴史教科書を買ったことも、私にとって感動的なことでした。

しかし、新学期が始まってまもなく、中国各地で大規模な反日デモが起きました。私は実際に目にすることはありませんでしたが、蘇州市内の「観前街」という繁華街でデモが起きたという話を聞いたり、以前食事に行った日本食街が廃墟になったと聞いたり、日中関係について考えさせられることが多かったです。中国のニュース番組では連日、日本のことが報道されていました。メディアによってネガティブな報道がされるのは中国だけでなく日本でもあり、真の相互理解のためにはそういった報道だけでなく、実際の交流が必要だと感じました。中国では「日本が好き」といった学生や先生がたくさんいます。私は日本語科の学生として、今後も日本語の学習を続けつつ、もっと自分の目で日本を知っていきたいと思います。

交流期間中に2泊3日で行った上海旅行も深い印象が残っています。上海では、豫園、東方明珠テレビ塔、雑技鑑賞の観光を楽しむとともにJTB上海やJETROなどの企業訪問に行きました。日系企業だったので、私にとって、中国における日系企業の事業展開がどのように進んでいるかを理解することができ、大学では学べない興味深い内容でした。将来、アジアを舞台に働きたいと考えているので、今後の中国市場や、求められる人材、大学在学中に何を学べば良いかなど、たくさんのお話を聞くことができ良かったです。

この一か月、本当に充実していました。毎日、交流生たちと日本語で話したので、日本語の能力がますます伸びました。その上、彼らから日常の教科書では学べない日本文化のことが知ることができました。この交流で学んだことは、まずはなんでもやってみること。限られた時間の中で、より多くのことを吸収するには、チャレンジしないと何も始まらないということです。言葉が通じない事を理由にして、閉鎖的になるのではなく、とにかくやってみようとするチャレンジ精神が大切だと思いました。そして、日本人に対するイメージも変わりました。この交流で知り合った日本人の友達、今でも私とメールのやりとりをし、ソーシャルネットワークである Line

で連絡を取るぐらいまで仲良くなりました。基本的には、日本語を使いますが、時々私の日本語のニュアンスが違っていると指摘してくれるので日本語の勉強にもなります。

私は、いかに複雑な中日の国家関係であろうと、中日学生の交流はこれからもきっと友好的関係が続くと思っています。これから私の出来ることは、日本人の友達をいっぱい作る事です。いっぱいの友情は、きっと中日の未来に繋がると信じています。

中日の未来のために私たちが出来ること

大連大学 杜洋々



中日関係は歴史の問題ですと不安定の状態に置いています。中国人は日本または日本人のことが分からないからこそ、激しいデモを行って、冷静に問題を解決することができませんでした。先入観に捕らわれやすいのです。

私たちはもっと日本の文化を了解すべき、もっと日本の素敵なおとこを周りの人に紹介すべきだと思います。これも中日両国の青年間の相互理解と交流を深めるための鍵だと思います。

そこで、日本の文化は中国に入り込んだ一つのきっかけは日本のアニメーションだと考えられます。

前世紀 80 年代、中国人はまだ 9 寸の小さいテレビを使っていました。このモノクロテレビで「鉄腕アトム」は中国の子どもの生活に入りました。優しく勇敢なアトムだけではなく、その後「ドラえもん」「花の子ルンルン」「一休さん」などのアニメーションも中国に輸入し、中国の子どもと共に成長してきました。

考えてみれば、これらのアニメーションは大抵日本から伝えてくれました。

日本のアニメーションを通じて日本の風俗、日本人の生活習慣などの文化も中国の子どもに、知らず知らずのうちに影響を与えてくれました。

例えば、大人気の「ドラえもん」の中のキャラクターは皆それぞれの個性を持っています。どのような道具も出せるドラえもん、臆病で優しいのび太、親の脛をかむスネオ、意地悪くて力強いジャイアン、可愛い静香ちゃん…そして、最後にどんなことに遭っても、皆は勇気を出して一緒に困難を克服していました。人間性が溢れた素晴らしいアニメーションでした。

「ドラえもん」から、日本人は人の家に入ると「お邪魔します」を言います。ご飯を食べる前に「いただきます」を言い、食べ終わったら「ご馳走様でした」を言います…いろいろな習慣は中国人にとって簡単に見えるけど、とても身につけにくいのです。礼儀正しさはちょうど今の若者に欠けることなのです。

そして、日本の和室、日本の街、日本の料理なども「ドラえもん」が紹介してくれました。このような素敵なおとこ、皆によく知られたら、誰でも好きになるでしょう。

中国も自国の文化をアピールしながら中国らしいアニメーションが作られれば、日本の子どもも小さいころからもっと容易で中国を知るはずだと思います。アニメーションは両国の子ども、または若者にとってお互いに了解できる一番簡単な方法だと思います。たくさんの学生は日本のアニメーションが好きなので、日本語を専門として目指しています。私も日本のアニメーションに憧れてから日本語を勉強したかったのです。

しかしながら、小学生も大学生も日本のアニメーションときたら、キャラクターはかっこいいとか、可愛いとか、ストーリーがすごいとかの原因で日本のアニメーションが好きになったということです。勿論、これもアニメーションにとってあるべき特徴です。観客の目を引くため、いろいろな要素が必要とされています。

けれど、日本語を勉強し始めて、私は以前より日本への感心を強く持ちながら、前と違う視角で日本のアニメーションを見ることができました。もっと日本の文化を理解したいのです。時々、

一つのアニメーションの寿司屋や主人公の敬語の使い方などについてクラスメートと盛り上がってきたことがよくあります。とても楽しいです。

今、私はよく後輩と親戚の子どもに日本の素晴らしいアニメーションを紹介しています。相手は日本語が分かる人なら、美しい言葉が出てきたアニメーションを紹介します。相手は子どもなら、「ドラえもん」のような子供向け、日本らしいアニメーションを紹介します。

「出来るだけ、子どもと一緒にアニメーションを見る」と親に伝えています。「ちゃんと日本の子どものいい習慣を自分の子どもへ伝えよう」と私は親たちによく意見を出しています。

アニメーションは産業とされていますけど、私はアニメーションが人に影響を大きく与えられる文化の一つ、そして、国の間に自国文化を伝え、お互いに勉強ができるいい手段だと思っています。

アニメーションをいっぱい見た私たちはほかの人にお互いの国を紹介し、いいところをシェアすることは私たち若者のすべきことです。

当然ながら、アニメーションだけではなく、本も文化交流の無音の手段です。本を読んだ私たち自分自身の視野も広げるし、学んだことで皆と感想を換えて、もっと日本の美しいところを知るように頑張りたいと思います。

若者として私たちは両国の交流と発展のために、アニメーションや本などを通じて両国の文化を理解し、前向きで両国の立派さをアピールしましょう！